

旅行記

四 国 の 霊 場 を 巡 っ て

— 大師修行のお姿を思慕しつつ —

会員 清 田 義 雄

(佐賀市 東区)

(一) 再 遊 、 三 遊 の 旅

高水会長のすすめるこの言葉に刺戟されて、私は昨年十一月に つづいて、去る三月同じ霊場めぐりの道を再度巡って見た。そして強く感じていたことは、三度目は今度こそ歩いて廻りたい、せめて御詠歌の一つも覚え、経文を唱え、その自分の声を聞く中、瞬時に三昧の境を積み重ねながら、大師の心はふれる機会も多かったものと察願した。

それ程に心ひかれる大師とは、何がそうさせてくれるのだろうか。歴史では教わってきた。伝記も一読させて貰った。然し何にもわかっていなかっただけではあるまいか。

傍観する人の立場で知る大師は、もう私には必要は

麻の衣にあらむ笠

非に背儀 前二衣

足中草履をばし踏い

首はかたる 札付き

堅八寸に横中二寸

金剛杖を右にひき

左の御手は珠数もちて



ない。同行二人の気持でわかる大師を求め度い。年老いたせいであらうか。否、今度の頓挫がそうさせてくれたようである。

(二) 旅 の い で た ち

再度のお詣り、場所は同じでも、天候のちがいで、時刻のずれが、いろいろな経験もさせてくれた。

六十三番吉祥寺は、雨の日暮でわかりにくかったところも、今度は晴れてまだ日も高く、梅林・成就石・水源地蔵道標など、いろいろゆくり見ることができた。八十八ヶ所唯一の、本尊毘沙門天・脇侍吉祥天・善願師童子を祀られる吉祥寺。今は国道際で、山岳仏教の霊地とはかけ離れたような気易い場所である。

公認大先達の碑前で、一行の中の五人の白衣の女性を撮らせて貰った。信仰の固まり、強さのあふれる姿である。何気なくとらえて貰っただけであるが、南無大師遍照金剛の文字を背にした同行二人の書き印が、修行者としての自覚はつきりもつ姿貌が、外にあらわれている。帰ってそのスライドを映写して見て、何と心に響く姿を見せてくれたものかと、嬉しくなっている。

(三) 心 を 静 め る 莊 嚴 具

弘法大師の誕生地善通寺は、真言宗の総本山として、教王護国寺(東寺)・高野山と共に、三大霊跡の一つに数えられているが、さすがに宏壯なものである。父善通師の共莊園をみて、唐から帰朝後、真言宗布教のため勅許を得て、まず一門の氏寺建立させられたわけである。唐の青龍寺を模して計画された寺院は、当時は今の二倍の寺域であったと云われる。現在でも伽藍と云われる東院、誕生院といわれる西院にわかれ、勅願寺時代は一般の人達が渡るのは二十日

だけ友ったので、二十日橋と名がつけられた橋でつな  
がれている。

昔は第一番の札所とされた時代も有るようであるが、  
新しいもの、古いもの諸々の宗教施設が良くとどかつ



真言宗 總本山 善通寺 略絵圖

ている。団体参拝者のため宿坊と呼ばれる宿泊施設、四  
〇人収容できるいろは会館も完成されている。  
今のバス利用団体旅行の人達が、この宿泊施設を使わ  
せて貰えることは有り難い。安いという評判ではない。夜と  
朝のお勤めにも加えて貰えるからである。

礼堂・中殿・供養殿・奥殿の四棟を一つにまとめた本堂  
の奥殿に、ここで最も大切に扱われている大師の御影が飾  
られていた。また、礼堂ではお勤めが行われる。金色の多  
宝塔を中心にした数々の仏具が荘嚴された中央壇に、管長が座  
にへかれる。昨年秋の初回の時には一人の伴僧であつたが、  
今春三月の回には数名の伴僧が列席してくれた。お勤めに  
参加の同行も、堂にあふれる位の人数になった。

ろうそくの光という力は心をおちつけてくれる。管長の  
声に和して誦経がはじまる。心経を唱える声も次第に高く、  
次第に早くなっていく。心が洗われるようである。

法話さきき、大師が惠果阿闍梨から授けられたという、  
閻浮壇金で作られた錫杖の拝観を終ると、中殿の中央まで  
進ませてくれる。奥殿の御影をここから拝した後、戒壇め  
ぐりがある。延長百メートルの真暗な戒壇であるが、夜の  
戒壇めぐりは、何と恐ろしきを感じたのだらうとした  
誤であるうが。かつて昼間の明るさから、急にこの暗い道  
に入り込んだ時は、ちよつと足のすくむ思いがした。ご婦  
人が腰をぬかした話などが伝えられているが、案内僧の「  
よこしまな考えをもつ人は通れませんが」と先入感を  
持たされたせいかもしれない。今日は案内もなく、一途に光  
を求めて進むのみ。

三泊四日の旅行の中で、靈山寺を加えて二日のこのお勤  
めに出入り心境は、両所の法話と共に、今後の霊場めぐりを  
最も意義深いものにしてくれた。

(四) 凡夫に色と形と

御本尊を拝みたい。愛山寺の住持は形にとらわれず思  
 さいましめられた。然し各霊場とも写真や博物館で見せ  
 て貰う国宝級の形像が沢山ある。形を知るだけなら写真  
 技術も進んで来たし、印刷技術の進歩もめざましいので、  
 図版の蒐集も可能である。然し私は四国の土地、建築も  
 含め、莊嚴された空無気の綜合された中で拝みたい。自  
 分の気持を拝む気持になるように、静めてじっくり拝み  
 度い。特に真言密教の布教に、大師が命をかけて招来し  
 た現物もあり、儀軌もあり、即身成仏を唱えられた大師  
 の遺られた色と形がある筈である。図版や圖書は知識と  
 して解明してくれても、自分の気持に「呪」として納得  
 させてくれるものではない。

空海の「請来目錄」に、

「仏法の真理は色も形もないものであるが、それを直  
 観するためには色と形によらなければ成らない。特に  
 悟りされない者に対しては、図画を借りて示すが最も  
 よい」

と記されている。したがって、仏像や仏画は經典と同じ  
 ように重要な意味を帯びている。そのため仏像の製作  
 は、職人の勝手な考えにまかせざるべきものではない。そ  
 のことは「七日経」に明確に示されている。

もつともこうして事は、高野山や東寺(教王護国寺)で立  
 派に整理された形で拝観出来るようになった。特に東寺  
 は妙願寺として、終戦までは吾々の目にもふれる事のでき  
 なかったものを、公開して下さっている事は有り難い事  
 である。

それでも尚かつそれを四国で求め度いのは、最も庶民  
 的に最も身近に感ぜられる寺々であるからだ。

(五) 行(ぎょう)

かつて四国は流人の島でもあった。八十八ヶ所の霊場  
 ができてきたのも、多くの絶望の人たちを包容してくれた  
 島である。こうした人々を救い得た大師の、大きな慈悲  
 の心を形として拝み度いのが、凡夫の切なる願いである。

霊場めぐりは見て廻ることではなく、行ずるとこそであ  
 ると考えさせられた。通路は苦難の無銭旅行で、家も妻  
 も金も、持っているものは皆捨てたつもりになって、毎  
 日七軒宛門に立って乞食しなればならぬ。そこに修  
 行の意義があり、救いの道が開けると言われてきている。  
 しかし、むづかしいことである。

昨秋は暗れた穏かな日で、展望とほしいままにさせて  
 くれた空戸は、今頃はあいにくの雨であつた。風こそ強  
 くはなかつたが黒ずんだ青味のある海、激浪に荒らされ、或  
 いは鋭く、或いはゴツゴツといった崖しさを一層感じさ  
 せる。風運れ三島の瞬間記録を残すこの空戸。おそらく  
 道もなかつた要熱帯樹林のこの山地を求めて、修行なさ  
 れた大師の求道心の強  
 さを想う。

大師十九歳、深達を  
 約束された大空を中途  
 にして去り、阿波の大  
 竜嶽に登つても其の志  
 を得ず、更にここ最御  
 峰を修行地として遂に  
 北「虚空蔵求願持法」  
 の夢を齎された。儒教  
 から仏教に転せられた



新左衛門決意の場所である。

粗衣をまとい、夏冬の暑さ、寒さとたたかい、断食苦行を重ね、辛苦に耐えしのぶことで自らを鍛しく、競いなから、衆生済度の一念を貫き通さんと決意し、自信を待たれた第一の場所である。

大師修行の場所と伝えられる「御蔵河」は、バス道のすぐそばにある。「八十八ヶ所道開」の中にある。

「八坂坂中難所にて 八次法中又難所 飛石ころころの石の数々ふみわけて 二十四番は東寺 此れ法性の愛戸にて 大師修行の御時 毒蛇の障りありければ 室戸と聞けどわればわれば 有為の波風立つなりと」

ここには大師の遺跡が多い。一夜建立の岩屋、水掛地蔵、行水の池、目洗いの池など……。

「土州室戸に勤念す、谷響きを惜しまず、明星采影すと、三敬指帰」に書かれている。鹿から帰朝の後も、此の地に戻られて、最精禪寺と聞かれた。寺は急な山の上にある。ここまでくると岩も見えない。へんろ路は「駒つき八丁」の急坂を、七〇〇段登ることになるが、私共はすばらしい景観を見せてくれる室戸スカイラインを通って、駐車場から三〇〇段程で山門にたどり着く。

音響石をたいて本堂に向かえば、多宝塔が新しくなっている。本堂も軸部は昔のままだが、屋根はふき替えられている。軒縁が無頭着な修葺が気にかかる。大師堂山門は古いままで風格を失っていない。裏道の石段は短かい距離ながら、昔の面影がしのばれる。

こうしてここも、次第に景色中心の観光地化していく様である。然しまだここは良い。頭の欠けている石仏群に、真新しい衣の奉納を見る。お詣りに来られる人々も、親代々言い伝えられてきた、大師信仰の人達だぞと感ぜたられる姿が、かたや見られるからである。

一モロの道楽で、法界の父の手習ひ。何とぞ天下に名を成す男子と授け給えと祈られて法窓をいたたいた。法窓の母も真言宗の寺の娘であり、広瀬家の当主は、生涯に一度は四國順拝の習慣があつた——と、日田の友人が教えてくれた。

高尾道に乗ってドライブする霊場巡りに化しようとも、現地の霊場に足を運ぶかぎり、大師へ敬慕の心は続いていくものと思われ。

### (六) 伝説と歴史的実案

霊場といわれる所に伝説をもたない所はないが、四國程只一人の方にまつわる伝説を、これ程大きなまとまりの中に収められているのも少ないのではなからうか。大師の足跡は全国約百ヶ所がわたり、私どもも身遊かざるところまでその足跡を辿ることが出来る。

四國にお詣りして各地の伝説を味わいながら、其の構想の最も大きな伝説を、第五十一番石手寺で聞くことができた。門前の石像、衛門三郎物語りである。

松山市浮瑠璃町八坂の八坂寺に次ぐ、番外札所文珠院得盛寺の近くは、衛門三郎の子も達を弄へたという八坂がある。そこを第一場面として構成される。この八坂は七女お姓をもつ八坂氏は、私の福岡大学在任中親交のあった教授であるが、同職三十年の間のいぞその姓の八坂がこれに伝説に關係をもつ事など聞いた事はない。とところが四國旅行出發前に父し振りには、是非会いたいと夫婦連れで藤沢市から訪ねてくれた。たまたま四國霊場巡りの計画を話すと、「その八坂は私の家だ」と云われ、言葉に出ない驚きがあつた。しかもそれは、越智氏を祖とする河野一族に連がることわかつた。ご自分でもその伝説を信じ、家系への信頼に身を寄せて居られ

る篤実の士である。私もこの奇しき邂逅（めぐり合せ）に驚いて、久し振りに語り明かした。河野家の出である一辺上人も、その家計に つながる方である。臼科藩主稲葉氏にもかかわりをもつ家柄である。

茅二場面は、阿波の国「通路」に在りし藩所、その山上にある第十二番焼山寺への中腹杖杵庵の物語りになる。つづいて第三場面は、ここ第五十一番石手寺、「衛門三郎再生」に つながれる。

この伝説を書きあげた人が誰かは知らないが、恐らくは真実に近い（大師のお力なら有り得ること）ものと思われ、心の真実を表現していると考えられる。

伝説は科学的証明を要求されるものではない。実際に善導教化の大きな力となつてゐるそれらから大師伝説は、香川県だけでも八十、瀬戸の島々にも及んでゐる。四国全体では細かい資料はないが、三〇〇に近いかではなからうか。

著名なものとしては「大師和讃」の八十八首道則の中に求めても、随分沢山の奇蹟、いましめ、恩恵が感じこまれている。

句切りをつけて読誦し易い作文が、自然にリズムに乗つて唱へ出される和讃や御詠歌の唱声が、自分も胸膈をこも高きものに浄化してくれる。

歴史を何も知らない私に、こうした行ずることの尊厳を教えて貰つた事が、この旅行の大きな収穫であった。

このあと「歴史上の大師」を書いて、自分の気持ちの確かさをしたいと思つたが、長くもなるし、私の仕事ではないと思うようになったので、外への発表はさけることとした。  
(おわり)

短歌

四国霊場巡拝の旅

会員 川 田

（休生町七宝洞、伝説）

裡深く修業大師の像おきて同行四十二人通路の旅へ

佐伯清おかぬに染めてのぼる陽に霊場めぐりの無事を祈りて

幼なくて遊きたるおふのうつしえを抱きて霊場順拝の旅へ

ねがいごと秘めてめぐれば放生の鳩の群れに心ひかるる

善通寺護摩たたく香煙たえまなく大師御放生の霊跡ときく

佐伯藩主穿達の燈籠に刻む文字金刀比羅宮の参道に読む

園り二十一キ口水を湛える清濃の池築きし大師が偉徳偲はる

源平の古戦場に知る屋島浦埋立てあるを惜しみつめぐる